

桐生清桜、二代目和太鼓部！

～彼女ら・彼らはなぜ和太鼓に夢中なのか！？

～桐生清桜高校和太鼓部の活動から高校部活動の意味を考える～

高校の部活動と言うと、運動部なら野球部やサッカー部など、文化部だったら美術部、吹奏楽部などイメージしやすいですが、みなさん、和太鼓部ってイメージできますか？「桐生シルクホールで高校の和太鼓部がすごい演奏をするらしいよ」というわがフォーラムスタッフからの情報をもとに、「よし行ってみよう！」と4人のメンバー(瀧口、向田、船橋、坂田)で乗り込みました。行ってみたら本当にすごい！最初から最後までその迫力に圧倒されっぱなし！これだけすごい和太鼓部、どう維持されているの？決してメジャーとは言えない和太鼓部だけど、なんでそんなに夢中になれるの？部活っていったい何だろう？考えればいろいろ不思議が出てくる高校の部活動。日を改めておこなった対談とインタビューから部活動というものを考えてみたいと思います。まずは、同行取材した和太鼓経験者である向田さんの生感想から。

ド迫力の二代目定期演奏会

やっぱり“ナマ”がいちばん

8月11日久しぶりに顔なじみのみんな(4人)と顔を合わせることができた。目的は清桜高校和太鼓部の演奏を観るためだ。観終わった後の感想は「やっぱり“ナマ”がいちばん」だ。他の皆さんの演奏会後の表情からも見て取れた。皆、いい表情をしていたように思う。“ナマ”の良いところは太鼓や笛や鉦の音の響きから演者の息遣いまで伝わってくるところだ。私は、自然に音を楽しむことができた。

この数年、世界中が新型コロナウイルスの影響で、人々が「密」になるモノから遠ざけられてしまった。この定期演奏会でさえ、開催が危うかったと聞いている。そんな中での演奏会、言葉にはうまく表現できない感動があった。

“青春ってすごく密なので”

この定期演奏会の後、何日もたたない時にふとその演奏会を思い出させるようなフレーズが飛び出した。今夏、甲子園で初優勝を果たした仙台育英高校の監督のインタビューの生中継時である。「そうだ、あの演奏会には青春がこれでもかというくらいにつまって



いたのだ」と。私たち、鑑賞している側は和太鼓の音だけを聴いているのだけではなく、演者のすなわち彼女ら・彼らの青春を見ることができたのだ。それがあまりにも素直でまっすぐでひたむきで、その姿に我々は感動をもらっていたのだ。

その演奏会では生徒自身が司会・進行をおこなったり、3年生の一人ひとりが一言発する機会もあった。それがまたなんともいえない味となっていた。演じている時とは対照的で、表情がフッと普段見せるような顔つきにもなっていたように思う。とにかくアツという間の3時間であった。素敵な時間をありがとう。(向田仁美)

桐生清桜の和太鼓部の秘密を顧問に迫る！

清桜和太鼓部ってどんな部？

群馬県立桐生清桜高等学校は、令和3年(2021

年)に桐生南高校と桐生西高校(以下桐西)が統合して開校した2年目となる高校です。

桐西から引き継がれた二代目和太鼓部、担当2

年目となる主顧問の平山保先生と桐西和太鼓部の創設に関わった船橋(平山先生とは以前同僚でもあった)と坂田で対談を行いました。

まずは伺った清桜和太鼓部の基本情報。

- ・部員数：38人(3年8人、2年14人、1年16人)、顧問3人(和太鼓経験者ではない)
- ・太鼓数：長胴(大太鼓含む)18台、締太鼓8台
- ・活動日：月火木金(6時頃まで)と土。必要に応じて日。

<実績>(第2回定期演奏会パンフレットより)

○令和3年度

- ・第45回全国高等学校総合文化祭「紀の國わかやま総文2021」郷土芸能部門 出場
- ・第27回群馬県高等学校総合文化祭郷土芸能部門 準優勝(優秀賞)

○令和4年度

- ・太鼓祭第3回全国七人制和太鼓選手権大会女子の部 第6位(日本太鼓協会)
- ・第12回関東地区高等学校和太鼓選手権 出場予定



—(坂田、以下名前省略)いやあー、定演の演奏は迫力がありました。

(H)(平山先生、以下H)今の練習場(上写真中央の白い建物)になるまで部屋の確保が大変でした。騒音クレームがやはりあるんです。

—1年、2年の部員数が多いですねえ。

(H)中学校のときからすでに(清桜和太鼓部の活動や実績のこと)知ってて、入りたいと言ってきていて。

—地域で演奏する機会はあるんですか。

(H)昨日も近くの老人ホームで。桐生まつりや町

内会とか、生徒出身の幼稚園なども。コロナの2年間は本当に少なかったのですが、今年度になって月に一つ二つと。

和太鼓部の指導って誰がやるの!?

—指導は誰がやるんですか？

(H)私は専門ではないので、以前は地域の人、今は専門の外部指導者の方に、月1回くらい来ていただいています。

—(船橋、以下(F))発表会やコンテストにはそれなりの条件が必要だから、指導者は重要だね。



(H)中学では外部委託が進んでいるが、地域の方に入ってもらおうというのも良いかと。

—(F)地域の方たちではあそこまでいかないよ。これからのことを考えると、卒業生を組織することが大切だ。

(H)教員にも作曲もできてしまうような和太鼓経験者がいるのだけれど、高文連専門部(高等学校文化連盟郷土芸能専門部。群馬県高文連は高・高・安・安・藤・藤・藤・関・清の6校が所属)にいないし、該当の高校に来て(配置されて)いないんです。

—(F)こういう(まつり芸能集団「田楽座」のチラシを指して)プロの劇団の人の力を借りるのも大事だね、卒業生だし。

—演目の中の「豊年太鼓」は郷土芸能で、この田



楽座が楽しく演じていますよ。

—(F)部員たち、みな明るく楽しそうに演奏していたけれど、ちょっと硬いね。もっと心から楽しめるといい。郷土芸能は地域の人が見て楽しい、人を楽しませて自分も楽しむ、そういうことが見に行くと学べる。

生徒にとって部活動とは？

—生徒たちが叩くということについて、コンテストもあるし、顧問としてどうですか。

(H)生徒たちは勝ちたいとすごく思っている。ただどちらが主と言ったら地域との交流というか、和太鼓をいろいろな人に聞いてもらってというのが第一で。

—(F)生徒はそう思っていない？

(H)いや、思っているはずですが。基本的には依頼演奏は断っていない。関わりを持って欲しいというのが一番です。それをやらずにコンテスト一本というのはおかしな話で、まずはというところで。

—(F)地域活動が第一で、コンテストは結果がついてくる、というのが良いんじゃない。生徒をそこに追い込んでいくとたぶん良くない。



(H)コンテストで選抜するかどうか悩んだ時がある。どちらがいいかと言ったら難しい所だけれど、みんな行った方が最終的にはレベルが上がるんじゃないかと思う。

—(F)みんなレギュラーで良い。そこが和太鼓の良いところだ。

(H)選抜するとギスギスするんですよね。

—和太鼓部に入って変わったという生徒は？

(H)教室での評価(勉強の評価)とは違う生徒がた



くさんいますから、自信にもつながる。これだけを目的に来ている生徒もいる。

—(F)ここが居場所だという生徒がいるでしょう。(H)生活にも良い影響を与えていますよ。うちは運動部じゃないけれども、活動をやっている方の部類だと思う。休日もやり始めたら一日やっちゃいま



すから。

—教員はどう見ている？

(H)先生方の評価は何とも言えないが、商工会のイベントなどで、「和太鼓部、イイね」と言ってくれる地域の評価はある。就職する子なんかはぜひ書いてくれと言っています。

ハイレベル和太鼓部の秘密

—(F)あれだけの人数であれだけのレベルにもってゆくのは大変だ。

(H)作曲は今ほとんどないのだけれど、アレンジしたり、音楽性のある子も何人かいて、がんばっている。

—(F)やっているとアイデアが湧いてくるんだよね、ここをちょっと変えてみたらおもしろいんじゃないかとか。

(H)楽譜通りというのはない。新しい曲はつくれていないけど。



—(F)曲をつくるのは別、これだけであれば十分だよな。これだけの曲を維持してゆくのだって大変だ。

—指導者が張り付いているわけでもなく、これだけの活動がどうやってできている？

(H)上級生から下級生に引き継ぎ引き継ぎして。うまくいったかどうか。

生徒が自分の言葉を語れる部

—(F)定演の最後で三年生の一言は？

(H)恒例だけど、今回は一般向けということでやらない予定が、やってしまった…。

—(F)良いと思うよ、高校生なんだから。どうして定演をやってきたのか、やってこれたのかを発表する場だから。そこをちゃんと語れたら良いのかなと。高校生はステージで自分の気持ちを話すこと自体がないから、照れくさそうにでも話せる場があることが良い。和太鼓やってなかったら何もしゃべれないんだから。



地域に生きる和太鼓部

—和太鼓部はマイナーな存在だけど、顧問としてどんなふうに見ている。

(H)顧問として外部との接点が多いんですが、学校のPRの手段の一つとして…。地域や保護者の理解がないとできないですし、学校内部だけでやっているわけにはいかない。外とどううまく関係を持ってゆくか。

—(F)和太鼓部というのは地域の中で学校をつくる時のポイントになる部だ。

(H)「探究部」という総合的な探究の時間の係の担当で、いかに地域と関わりをもつかとか、企業と連携した課題解決授業とかをやっているんですが、なにぶん和太鼓は地域との付き合いがたくさ

んあるんです。一つの部だけれど、学校の看板を背負ってやっているというのは生徒にもある。

—探究部というのは？

(H)私の分掌で、学校の授業自体も地域との連携を強く求められている。

—(F)普通高校では難しい、普通科目だけだから。

(H)大会で成果を残すというのはあるんだけど、地域との日々の付き合いというのがとても大切。地元の方も清桜高校を認知してくれる。和太鼓部がある学校というだけで話がしやすい。

—(F)和太鼓がきっかけで始まった地域連携は？

(H)それはないけれども、(私自身が)和太鼓じゃない所で街のイベントで顔を合わせることがある。

—(F)人とのつながりが広がるんでいいんじゃない。地域のおじさん、おばさん担当している。

—それは重要だと思う、教員自体が外との接点が少ないから。

(H)自分もそう思っている。楽しみにしてくれている人もいます。



和太鼓部員のホンネを聞き出す！！

顧問の苦勞、顧問の想い、よくわかりました。それにしても部員たちのあのド迫力の、夢中になって叩いている熱量たっぷりのあの演奏は彼女ら・彼らのどこから生まれてくるのだろうか。



—和太鼓部に入った動機は？

(田中館副部長3年)小学校2・3年から(地域サークルの)あづま太鼓に入っていて、桐西は強豪校だと知っていた。太鼓は自分の特技でもあるので、そこでがんばりたいなあとと思って入りました。

(星野次期部長2年)吹奏楽部に入ろうと思っていましたが、オリエンテーションで動画を見て体験に行ったら先輩がかっこよくて、私も叩きたいなあとと思って。

(石田1年)6歳から地域の赤堀ひごりも太鼓をや

っていて、生かせる学校ということで、ここに入ろうと思いました。小3の時地域のお祭りで見て、カッコいいと思って。

(石田部長 3年)自分は保育園のときに少し太鼓を打ったことがあるだけだったけれど、学校説明会で演奏を聞いてカッコよかった。知り合いから前に聞いていて、説明会前に先輩から呼んでもらって定演も見て、この部活に入ろうかなと思ってました。



—何をめざしてやってきた

(石田部長)大会優勝のことも考えているけれども、一番は地域の人たちに和太鼓の楽しさを知ってもらうこと。自分たちの演奏を見てカッコいいと思って入学してくれることを考えながら、広めることを意識してやってました。他の人に味わってもらいたい。

(田中館)私も一緒なんですけど、大会優勝目指して、保育園や老人ホームでの依頼演奏とかはお客さんを楽しませるように。一緒に楽しんでもらいたいな。自分たちが叩いて楽しむんじゃなくて、自分たちと一緒に盛り上がってくれて楽しめるような。

(星野)依頼演奏や大会をやりきるっていうのもあるんですけど、部活って人付き合いも多いじゃないですか。人数も多いので、まとめる側としてどうまとめて最後までやりきるか。自分のことも相手のことも考えて達成していきたいなと思っ



てます。

(石田)入部してまだ半年くらいの頃、実力を伸ばして、先輩みたいにかっこよくできるようにがんばって練習して、と考えながら部活をしてました。

—和太鼓の魅力について

(石田)元々吹奏楽部をやってた木管とか金管とかあるけど、叩くということだけで感動を与えられるのが和太鼓の魅力。

(星野)太田市の友だちに、入っているだけで「カッコいい」って。「心臓に響く」と興味を持ってくれて。マイナーな分知ってもらおうと刺激になるんだなあ、すごいなあと思いました。

(石田部長)八木節と違って、いろんな打ち方や大きい太鼓を使って音の迫力がありますね。自分の動きを動画で見てカッコいいというのが魅力だと感じます。

—「カッコいい」って何がカッコいいんだろう？

(石田部長)動画で見たりしてカッコいい。依頼演奏でもおじいちゃんやおばあちゃんが「カッコよかったよー」って言ってくれるんですよ。

(田中館)一つの太鼓で打つ曲もあれば二連、三連でたたいて、バチをクロスしたりというのも魅力。担ぎ桶太鼓だったら両面打ちで細かい打ちを素早く打つのも一つの魅力なのかなって思います。—バチさばきに魅力を感じているんだねえ。

—では部長さん、一番伝えたいことを

(石田部長)楽しかった。ここでなくても他の所でも和太鼓やって、みんなに和太鼓の楽しさを知って欲しい。

—最後に船橋さんから

—(F)桐生清桜高校の和太鼓部の活動が続いてゆくためには先生や寺門さんだけではできない。卒業していった人たちがどうやって応援できるのかということを考えて欲しいなと思います。

—みなさん今日は本当にありがとうございました。

取材を終えて ～「かっこいい」が生徒の自立を育む部活動～

今回の桐生清桜高校和太鼓部の取材から部活動のいろいろな側面を改めて再確認することができました。では一番重要なこと、生徒にとって部活動というのは…。

和太鼓部の生徒は大会、コンテストに大きな力を注いでいるが、顧問と同様に地域からの依頼演奏を一番大事にしていることがわかりました。それにしても彼女ら・彼らがあれだけ和太鼓に夢中になるのはなぜなのか？インタビューの中で何回も繰り返された「かっこいい」に秘密がありそうです。それは一体何なのでしょう。



思いっきり叩き、演舞している部員たち。「これが私だ」と言わんばかりの生徒たちの顔を見てください。和太鼓の世界にどっぷり浸っています。何らかの表現活動を経験した人には思い当たる節があるはず。精一杯の自己表現をした時、自分の存在を実感している自分がいることを。そう、そこに「かっこいい」自分がいるのです。地域の人から「かっこいいよー」と声をかけられることで、さらに他者と自己のつながり意識が育ちます。彼女ら・彼らは意識しようがしまいが、夢中になって自分探しの道を歩んでいるのに違いありません。

部活動は教育課程外と位置づけられていますが、生徒が成長する重要な場のひとつです。生徒の自主、自立の実現に向けてこの和太鼓部は大きく貢献しています。学校現場、教育行政のみならず、部活動の地域委託も議論されていますが、不要な業務を減らし、「かっこいい」生徒を育てる小さな部活動・地域連携づくりを検討してみませんか。
(坂田尚之)

◆桐生清桜和太鼓部のルーツを探る

～小さな活動が高校に存続し、大きな部となった事例～

桐生西高校で初めて和太鼓に取り組んだのは1999年秋の文化祭。当時、生徒会顧問であった多賀谷さんが文化祭を作り直す取り組みのひとつとして元気の良い男子生徒たちに声をかけ和太鼓に取り組んだ。前工の和太鼓を借りて私が指導した。2001年の秋に西高フェスタという文化祭を実施するにあたり、校長が200万円の予算を確保して和太鼓を購入した。

その後も生徒会有志を中心に、体育祭なども含む校内行事、地域の夏祭りなどで演奏の機会が増えた。多賀谷さん自身も上州境雉子尾（キジオ）太鼓に所属しており、そのメンバーの力も借りて和太鼓指導を行ったのだろう。その後萩原さんが引き継いで、2005年に和太鼓部が設立された。萩原さんの後は生澤さんが指導した。その後は小堀さんという方で2009年ごろから19年まで顧問、2019年4月から現在の平山さんが顧問をしている。

2014年に多賀谷さんの所属する雉子尾太鼓から桐西に進学した女子とその母親が和太鼓部の活動に大きな刺激を与え、2016年に初めて定期演奏会が開催され、その女子たちの力で2017年、全国高校総合文化祭に参加できた。現在技術指導をしている寺門氏も、先の雉子尾太鼓の母親が紹介したという。

私は1988年の前工予餞会で初めて生徒たちと和太鼓に取り組んだ。芸人を呼ぶ予餞会ではなくて、手作り予餞会をつくらうとする取り組みだった。生徒にとって、特に教師にとって必要なことは活動の



言語化だと思う。言語化する場を作ることだと思う。それをすることで活動が停滞することから免れ、また、「一番病」からも免れることができるだろう。

「かっこいい」の言語化が求められていると考える所以である。

(船橋聖一)